しあわせ

10　月　号

夢の世に
夢にあらでみほとけに
すくわれてゆく
華のふるさと

「手を合わす母」

早くも十月。年々厳しくなる猛暑の夏を超え、秋本番を迎えた。鈴虫の声、ススキの穂が風になびくさま、絶好の季節である。

慣れれば手ですることを足でするようになるというが、コロナへの警戒感も薄れ過去最大の大きく高い波を作った第七波。

世界にならって日本も、コロナの危機よりも経済の縮小の方が怖ろしいとばかりに動け動けというスタンスに変わった。確かにウイルスは一面では、生命のつながりや進歩に貢献しているともいわれる。

諸行は無常であり、諸法は無我であるとのお釈迦様のみ教えどおりこの世は常に動き変化し、止まることなく変化し、進歩している。ロシアのウクライナ侵攻という蛮行、中國による台湾への脅威、あるいは北朝鮮の威嚇行動などウイルスより怖ろしいことを人間は起こす。人間こそ地球破壊の大悪人かもしれない。

法座案内

＜仏教婦人会追悼法要＞

十月　二十三日（日）　昼席・夜席
　　　二十四日（月）　昼席
法話　自坊住職

※「昼・朝・昼」から「昼・夜・昼」に変更。

＜法味の会＞

十月　二十一日　午前十時～
お話　自坊住職

※本堂内は常時換気しておりますが、参拝の際は、検温・マスク着用をお願い致します。

府中町山田二丁目二ー五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八一－四八二二

夢の世に　夢にあらでみほとけに
　すくわれてゆく　華のふるさと

二十年以上も前ですが、祖父から、島根のお医者さんが作られた歌だと教えてもらいました。夢幻のようなこの世のなかで、仏さまに救われてゆく、この一事のみ夢ではなかった。という歌われているのですが、これはまさに夢とうつつをひっくりかえす一首ですね。

わたしたちはふつう、自分がこの目で見たもの、自分がこの手で確かめたものを、間違いのない、確かなものと考えています。そして、この目で見ることのできない、この手で確かめられない仏さまの救いやお浄土の方を、有るのか無いのかわからない不確かなものにしてしまいます。しかしこの歌は、真偽が逆転しています。自分の見ているものこそ偽りであり、かならず救うと喚びつづけてくださっている仏さまの仰せこそ真実であったと、このお医者さんは詠われたのでした。

考えてみれば、私たちのこの目は、いったい何を見ているのでしょう。ある先生は、「この世の中には、三人しかおりませんなあ」とお話されていました。その三人とは、

一、わたしにとって都合の良い人
二、わたしにとって都合の悪い人
三、わたしにとって関係のない人

だと言われました。はじめこのお話を聞いた時には、なんとも極端だなあと感じましたが、よくよく自分の日常をふりかえると、たしかにこの三人のほかは見当たりません。もしそうであれば、わたしの目は、かけがえのない〝人〟ではなく、〝わたしにとって〟という都合を見ているに過ぎないのでしょう。それはまさしく、わたしが描き出した虚構といわねばなりません。たとえわが子であっても、この三人を出ていないのかもしれない…と考えたとき、背筋の凍るような思いがしました。

そういえば誕生日の「誕」という字を字典で引くと、はじめに「うそ・いつわり・でたらめ」とあり、次に「いつわり・あざむく」と続き、六番目にやっと「うまれる」と出てきました。この世に誕生したことは、いつわりの世に生れたということかもしれません。

仏教では私たちのありさまを〝迷い〟と捉えます。つまり仏さまは〝迷っているもの〟としてわたしを見通されているのですね。分かったような顔をして暮らしているわたしですが、わたしが見ている世のなかには、宇宙の果てまでいっても真実はない。そう仏さまは仰います。ただし、迷っているものは、同時に、目覚めるべきものでもあります。つまり仏さまは、わたしを目覚めるべき仏の子として見てくださっているのですね。いつでも、どこでも、倦むことなく「汝はかけがえのない仏子である」と喚びつづけてくださっている、その仏さまの喚び声こそお念仏でした。

「ひっちゃーん、
　いっせーのーででいっしょに起きよう
　いーっせーのーでーっ　・・・・　」

深夜に長女がこんな寝言を言っていました。妹といっしょに朝起きる夢を見ていたのでしょう。起きる夢をみているというのがなんとも面白かったのですが、夢を見ているのは、寝ている子供たちだけではないのでしょう。自己中心的な心によっていつわりの世を描きつづけ、うなされつづけている凡夫。その迷いの凡夫のために、阿弥陀さまはお念仏となって喚びつづけてくださっています。

夢の世に　夢にあらでみほとけに
　すくわれてゆく　華のふるさと

ともにお聞かせいただきましょう。夢幻のようなこの世にあって、けっして変わることのない、けっして裏切られることのない仏さまの仰せに、遇わせていただきましょう。